

視覚的自己イメージに表れる両親との 関係についての探索的研究

筑波大学心理学系 井上 忠典

A study on the way the relationship with parents reflects on the impression of visual self-imagery

Tadanori Inoue (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305, Japan*)

The purpose of this paper is to investigate how the relationship with parents, which includes dependency, independence and conflict, reflects on the impression of visual self-imagery. Thirty university students were administered "the Scale of Dependency, Independence and Conflict with Parents" and then they were individually requested to visualize self-imagery in three scenes (alone, with father and with mother) and to evaluate "the Scale of Impression of Self-Imagery". The correlation of the two scales was mainly calculated and the results are discussed.

Key words: visual self-imagery, relationship with parents, university students.

問 題

心理臨床で用いられるイメージ(心像・imagery)は、それを思い浮かべる個人の視点の違いによって2種類に大別される。つまり、行為者となって自分自身が場面の中に入って行為をしているイメージ(acting イメージ)と、観察者として場면을外から見ているイメージ(observing イメージ)である。後者は、さらに見ている対象によって、自己を見ているイメージ(self-observing イメージ)と他者を見ているイメージ(other-observing イメージ)に分類される(大隈, 1987)。

一般に、心理臨床でよく用いられるのは acting イメージであり、特に行動主義的アプローチで用いられることが多い。その場合は、イメージが現実と等価であることが強調され、情動が喚起されるようなイメージが必要とされる。また、精神分析的アプローチの中には激しい感情を経験することに焦点が当てられるものもあるし(Leuner, 1977)、他にもイメージの中での体験を重んじる立場もある(田嶋, 1987)。いずれにしても、acting イメージを用いる心理療法では、情動的側面が重視される。

これに比べると、self-observing イメージ、つまり

視覚的自己イメージ(以下、自己イメージと略す)では、認知的側面が重視される傾向にある。というのも、このイメージ自体が自己のメタ認知を促す性質を持っているからである(種田, 1988)。

その認知的側面を最も重視したのが、Bandlerら(1979)の方法である。彼らは、自分の分身をイメージさせ、その分身の意図をくみ取ることにより行動の背後に隠された意図を探り、その意図に適合するような行動をイメージ中で実行させるという技法を用いている。これは、リフレーミングの一技法であり、注意の焦点を問題から過程に移行させ、行動に関する意味づけを積極的に転換させ、その状況へのアプローチの仕方を変化させようとするものである。

その一方で、情動を重視した試みもある。増井(1971, 1979)は、イメージ・ドラマ法の中で、自己イメージないし主役イメージを想起させ、それがどのようなことを考えたり思ったり、また、どのような表情や動作をしているかを確認する作業を繰り返していく。これにより、その個人とイメージとの間の個人的な必然性を意識させ、感情移入により付加された心的エネルギーをそのイメージ展開の原動力とさせることが可能となるという。

認知的・情動的両側面に焦点を当てて、自己イメージを積極的に利用した心理療法の一つに、イメージ分析療法がある(柴田ら, 1977)。これは、イメージに伴う不快、恐怖、不安などの感情を脱感作によって消去していくことにより、患者の内面に隠されている幼児期からのゆがんだ反応様式の修正をはかる方法として開発された。この治療法では、イメージ・セッションの導入イメージとして自己イメージを指定し、それに伴う感情を自律訓練法によるリラクゼーションによって消去させ、そこから自発的なイメージの展開へと導く。指定イメージを用いることは、イメージに何らかの枠を与えることによって、そのイメージ展開を治療的な方向でコントロールすることにつながる(梅田, 1983)。イメージ分析療法では、自己イメージを用いることによって、そこに反映された現実と内面とのギャップを縮めて患者の現実との関わりを保たせて、自我の強化を図り、著しい退行が起こるのを防止しようとした(森川ら, 1982)。さらに、症状の基盤にある患者のパーソナリティの未熟さや歪みにアプローチするために、イメージ展開の中心に自己イメージを置いた。そして、父母イメージを指定イメージとして想起させ、自己イメージを同じ空間に存在させることによって、パーソナリティ形成に重要な役割を果たした対象人物との相互関係に焦点を当てた(柴田, 1992)。言い換えると、発達過程における重要な他者との未解決な問題を、イメージの視覚化を通して意識させることになる(篠竹ら, 1988)。

ところで、イメージは、内在化された過去の対人関係によって規定された精神内界の構造や内容を提示することになるが、これを理解するには、Mahlerら(1975)の分離個体化(separation-individuation)を中心とした対象関係論的観点からの発達論が有効である(柴田, 1992)。分離個体化は、乳幼児が母親と自分が異なる存在であることを確認し、安定した母親表象と自己表象を確立するまでの過程である。その過程の中で、運動能力が高まって自分の意志で自由に動けるようになる喜びと同時に、母親からの分離に伴う不安が増大し、依存と独立の葛藤が激しくなる時期がある(再接近期)。Blos(1967)は、青年期において、親から精神的に離れ、自立し、個を確立していく過程を第二の個体化(the second individuation)と呼んだ。青年は家族への依存から独立し、幼兒的な対象との結びつきを緩めることによって大人社会の仲間入りをするが、その際に、幼兒的な依存、誇大感、安全性、満足といったものへの力強い退行的な引き戻しから逃れることを必要とする。そこに、幼兒期に生じた再接近期危機

が再燃し、親に対して依存と独立の葛藤が生じると考えられる。

青年期における依存や独立については、主に発達心理学の領域で、依存または愛着に関する研究として行われてきた。高橋(1969)の一連の研究では、依存性を自立性の対極概念であるという捉え方から離れて、発達に伴って消失するものではなく、変容するものとして捉えた。つまり、自立的な状態を依存性の連続線上にあるものと考えた。また、関(1982)は、高橋の考え方を踏襲しつつ、臨床心理学的な観点から依存の問題を捉えなおした。けれども、臨床的な視点から親に対する依存や独立を問題にする場合には、先に述べたMahlerの分離個体化やBlosの第2の個体化の観点から考える必要がある。児童期の依存状態の中から、機能的・生理的・社会的要因を背景として非連続的に独立欲求が高まり始め、そのために依存欲求と独立欲求の葛藤が生じて、それを契機に心理的な障害が起こりやすくなると考えられる。このように捉えることで、例えば適応の心理的指標の一つとなる自我同一性との関連を明らかにすることも可能となる(井上, 1995)。

心理療法の中で自己イメージを取り扱っていくためには、これらの発達過程やそれに伴う障害への知見を基盤にして、個々人に特有の未解決な問題を理解する必要がある。その際、想起されたイメージの内容やそれに伴う感情から、重要な他者との関係を読みとることが、臨床的な経験に基づいて行われてきた。実際の臨床では、このような主観的で共感的な理解が不可欠であり、重視されるべきである。しかし、イメージを用いた心理療法をより一般的なものとするためには、その共通基盤としてのイメージの読みとり方をより実証的に検討することが必要である。本研究では、依存欲求・独立欲求・葛藤を中心とした両親との関係が視覚的自己イメージにどのように表れるのか、イメージのいくつかの側面を取り上げて探索的に調べることを目的とした。特に、自己イメージを捉える観点としての認知的側面に注目して、「自分の姿を見てどのように感じたか」という自己イメージの印象性を中心に検討を行った。

方法

被験者 無作為に抽出した心理学専攻の3・4年の大学生、30名(男子15名、女子15名)を被験者とした。

材料 親との依存欲求・独立欲求・葛藤といった関係を調べるために「親との依存・独立・葛藤尺度」を用いた(Table 1)。これは、依存欲求尺度、独立

Table 1 親との依存・独立・葛藤尺度

【依存欲求】

1. 困っているときや悲しいときには、親に気持ちを分かってもらいたい。
4. 親には私のことを見守っていて欲しい。
7. 何かの決断で迷っているとき、それでいいよという親の一言が欲しい。
10. 人生の先輩として親を尊敬している。
13. 親に見放されたらと思うと、不安になる。
16. 親から吸収できるところは吸収したい。
19. 心配事があると親の声を聞いて安心したくなる。
22. 親が怒るのは私のことを考えてくれているからだと思う。
25. 難しい課題があるときには、親に手伝ってもらいたい。
28. 親とはふだんから、いい関係をたもって頼りにしたい。

【独立欲求】

2. 家にいても一人で過ごす時間を持ちたい。
5. 親に頼らずに自分の可能性を自分できりひらいていくのが楽しい。
8. 親にあまり干渉されたくない。
11. やりたいと思うことは、いくら親に止められてもやりとげたい。
14. 親の考えに合わせるよりも自分の思うとおりにしたい。
- *17. 私は弱い人間なので、親に支えてもらわなければ生きて行けないと思う。
20. 親にも、良いところと悪いところがある。
- *23. 親に自分の問題を話せず、いつも頼る一方になってしまう。
26. 親の考えが正しいとは限らない。
29. 親に頼らず、自分の判断に責任を持って行動できる。

【葛藤】

3. 親と話するとき、話し合いや相談というよりもむしろ押しつけと感じる。
6. 親の言うことは親にとって都合の良いことばかりだ。
9. 親が邪魔で本当にやりたいことができない。
12. 親といるとなぜかイライラしてしまう。
15. 親の言うことは、命令や禁止の繰り返しである。
18. 親と議論しているうちに自分の言いたいことがわからなくなる。
21. 自分のしたいことをすると、親が嫌がるので身動きできない。
24. 親といっても、自分を出せずに悲しく思うことがある。
27. 自分には自分の言い分があるのに、親はまともに取り合ってくれない。
30. 親は自分を受け入れてくれないと感じることがある。

注) *は逆転項目

欲求尺度、葛藤尺度の下位尺度からなり、各10項目、計30項目によって構成され、被験者に5件法で評定させた。この尺度は、依存欲求を「肯定的な顧慮・反応を他者に求める欲求」、独立欲求を「自己の独自性を保とうとする欲求」、葛藤を「依存欲求と独立欲求の2つの欲求の高まりによって生じる感情」と定義して、井上(1995)の尺度をもとに作成された。

自己イメージの印象性を評定するために、「自己イメージ印象性尺度」(井上, 1992)を用いた(Table

2)。これは「ぎこちない-自然な」などのSD法によって構成された評定尺度で、安定性尺度、活動性尺度、社会性尺度の3つの下位尺度、各5項目、計15項目からなり、7件法で評定させた。あらかじめ各項目の肯定-否定の傾向が明確にされている。

また、イメージに関する質問項目として、鮮明さ、詳細さ、生命感、自分の姿の認識度について、また、想起時の体験として、リラックス感、イメージの自発性についても7件法で評定させた。さらに、教示

Table 2 自己イメージ印象性尺度

【安定性】		
居心地の悪い	—	居心地の良い
苦しい	—	楽な
不安な	—	安心した
気持ち悪い	—	気持ち良い
ぎこちない	—	自然な
【活動性】		
おとなしい	—	活発な
消極的な	—	積極的な
目立たない	—	目立つ
さめた	—	情熱的な
暗い	—	明るい
【社会性】		
だらしない	—	きちんとした
自分勝手な	—	協調的な
ふまじめな	—	まじめな
散漫な	—	集中した
子どもっぽい	—	大人びた

注) 右辺が肯定的, 左辺が否定的な形容語.
左右の配置, 及び配列順序はランダム.

を与えてからイメージ想起するまでの反応時間も測定した.

手続き 父親との関係と母親との関係について別々に「親との依存・独立・葛藤尺度」を実施した後に, シールド・ルーム(防音実験室)内において, 個別に実験を行った.

まず, リラクゼーション課題とイメージ課題の練習を実施した. リラクゼーション課題では, 自律訓練法の重感・温感練習の言語公式「気持ちが落ちついている, 両手両足が重たくて温かい」という言葉を, 声に出さずに1分間繰り返させた. また, イメージ課題の練習では, 「誰もいない居間の光景」をイメージさせた.

その後, 実験に移り, 実験者の教示によって3つの場面での自己イメージを順次想起させた. 3つの場面での自己イメージとは, 「一人で居間にいる自分(S1)」、「父親と一緒に居間にいる自分(S2)」、「母親と一緒に居間にいる自分(S3)」であり, その提示順序はランダムに行った. それらの自己イメージごとに, イメージ想起の合図を受けて, 30秒間そのイメージを眺めさせた後に, 「自己イメージ印象性尺度」とイメージに関する質問等6項目(イメージ属性)を評定させた. また, 口頭でイメージ場面について簡単に説明させた.

結果の処理 「親との依存・独立・葛藤尺度」と「自己イメージ印象性尺度」については, 下位尺度ごとに合計点をその尺度得点とした. したがって, 得点範囲は下位尺度ごとに, 前者では5~50点, 後者では5~35点となる. また, イメージ属性は, 粗点をそのまま得点とした. イメージ想起の反応時間は, 対数変換(自然対数)した値を用いた.

結果と考察

a. 「親との依存・独立・葛藤尺度」と親との関係について

尺度の信頼性を検討するために, 下位尺度ごとに対象別(父親・母親)に信頼性係数を算定した(Table 3). いずれの下位尺度も α 係数が高く($\alpha = .75 \sim .82$), 内部一貫性が十分に保たれていると考えられた.

下位尺度間の相関を対象別に求めた(Table 4)ところ, 父親・母親の両者いずれに対しても, 依存欲求と独立欲求の間で低い負の相関が見られた($r = -.31, r = -.35$). この結果は, 依存・独立の概念をどのように定義し, その尺度の項目に何を含めるのかによって変わり得るものであろう. 低い負の相関が得られたことから, 高橋(1969)の述べたように, 依存と独立(自立)は必ずしも対極する概念ではないと言えるが, 依存の一つの状態として独立を捉えることが適切かどうかはわからない. また, 独立欲求と葛藤との間で相関が見られなかった($r = .08, r = .24$)のに対して, 依存欲求と葛藤の間で中程度の負

Table 3 親との依存・独立・葛藤尺度の信頼性係数(n=30)

下位尺度 対象	依存欲求	独立欲求	葛藤
父親	.80	.75	.81
母親	.76	.80	.82

Table 4 親との依存・独立・葛藤尺度の下位尺度間の相関(n=30)

下位尺度間 対象	依存-独立	依存-葛藤	独立-葛藤
父親	-.31*	-.68**	.08
母親	-.35*	-.49**	.24

* : $p < .05$, ** : $p < .01$ で有意

の相関が見られた($r = -.68$, $r = -.49$)。このことから、葛藤は単に依存欲求と独立欲求の狭間で生じるというよりも、独立欲求に刺激されて依存欲求から派生すると考える方が妥当かも知れない。これについては、発達モデルとして今後さらに検討する必要がある。

下位尺度の平均とSDをTable 5に示した。下位尺度ごとに、性別(男・女)×対象(父親・母親)の2要因の分散分析を行った。その結果、独立欲求と葛藤では、性別・対象の要因ともに違いはみられなかった。依存欲求の対象の主効果に有意な傾向($F(1,28) = 3.22$, $p < .10$)がみられ、父親よりも母親に対する依存欲求が高いことが示された。これは、家庭内における父親と母親の機能を反映しており、父親が課題解決的リーダーの役割を果たすのに対して、母親は人間関係を調節し、家族の情緒の安定をはかることに重点が置かれている(Parsons & Bales, 1956)。そのために、母親の方が青年の依存欲求を受けとめる役割をより引き受けているものと考えられる。また、被験者数が少ないために有意な結果とはならなかったものの、父親・母親の両者に対して男子よりも女子の方が依存欲求が高いことが窺われた。依存性に関する従来の研究で言われているとおり、女子の方が依存的行動を社会的に受け入れられており(Sears, 1963)、それが両親に対しても表れたものと考えられた。

b. 「自己イメージ印象性尺度」と自己イメージについて

尺度の信頼性を検討するために、下位尺度ごとに場面別(一人(S1)・父親と一緒に(S2)・母親と一緒に(S3))に信頼性係数を算定した(Table 6)。安定性と活動性の α 係数は高い($\alpha = .77 \sim .96$)ものの、それに対して社会性のそれは若干低い数値に留まっている($\alpha = .44 \sim .61$)。この下位尺度については、今後信頼性を高めるようにさらに項目の検討が必要とされるが、本研究では、信頼性に問題を残していることを考慮しながら、検討を進めることとした。

下位尺度間の相関を場面別に求めた(Table 7)ところ、S2の安定性と活動性の間に中程度の正の相関が見られたが、そのほかには相関は見られなかった。父親と一緒にいるときには、その関係によって情緒的に安定していれば個人の活動性は高まるが、不安定であると活動性が抑制されると感じられることを示している。

下位尺度の平均とSDをTable 8に示した。下位尺度ごとに、性別(男・女)×場面(S1・S2・S3)の2要因の分散分析を行った。安定性では、場面の主

Table 5 親との依存・独立・葛藤尺度の平均(SD)

下位尺度 対象	依存欲求		独立欲求		葛藤	
	父親	母親	父親	母親	父親	母親
男子 (n=15)	31.7 (5.8)	33.0 (4.5)	41.0 (4.0)	41.9 (3.5)	21.7 (5.4)	20.6 (3.2)
女子 (n=15)	34.7 (5.1)	36.0 (5.8)	40.9 (4.7)	41.7 (5.2)	21.5 (6.6)	21.5 (7.0)
全体 (n=30)	33.2 (5.6)	34.5 (5.3)	40.9 (4.3)	41.8 (4.4)	21.6 (5.9)	21.1 (5.4)

Table 6 自己イメージ印象性尺度の信頼性係数(n=30)

下位尺度 場面	安定性	活動性	社会性
一人(S1)	.90	.77	.61
父親と一緒に(S2)	.96	.87	.50
母親と一緒に(S3)	.95	.79	.44

Table 7 自己イメージ印象性尺度の下位尺度間の相関(n=30)

下位尺度間 場面	安定性-活動性	安定性-社会性	活動性-社会性
一人(S1)	.23	-.22	.04
父親と一緒に(S2)	.63*	.08	-.13
母親と一緒に(S3)	.15	-.16	.13

* : $p < .05$ で有意

効果が有意($F(2,56) = 4.02$, $p < .01$)であり、LSD法による多重比較の結果、S1及びS3よりS2の安定性が低かった。安定性では、性別に関係なく、一人である場面や母親と一緒にいる場面に比べて、父親と一緒にいる場面での安定性が低く、父親は自己の安定性を脅かす存在であることを示していると考えられた。

活動性では、性別と場面の交互作用が有意傾向($F(2,56) = 2.90$, $p < .10$)であったので、各要因の水準別に単純効果を分析した。その結果、S1で性差が有意傾向($F(1,28) = 3.83$, $p < .10$)であり、男子より女子の方が活動性が高い傾向にあった。また、場面の単純効果は、男子において有意($F(2,56) = 14.22$, $p < .01$)で、LSD法による多重比較によれば、S1はS2及びS3よりも活動性が低かった。女子においては有意傾向($F(2,56) = 3.19$, $p < .10$)で、LSD

Table 8 自己イメージ印象性尺度の平均(SD)

下位尺度 場面	安定性			活動性			社会性		
	一人 S1	父親と一緒 S2	母親と一緒 S3	一人 S1	父親と一緒 S2	母親と一緒 S3	一人 S1	父親と一緒 S2	母親と一緒 S3
男子 (n=15)	25.5 (5.9)	22.9 (6.7)	27.3 (3.4)	13.3 (3.2)	19.4 (6.4)	21.9 (3.2)	19.5 (3.8)	19.3 (3.8)	20.7 (3.2)
女子 (n=15)	26.7 (5.8)	24.1 (5.2)	26.8 (5.6)	16.5 (5.5)	17.5 (4.1)	20.5 (5.1)	17.7 (4.4)	21.5 (3.8)	20.3 (4.0)
全体 (n=30)	26.1 (5.8)	23.5 (5.9)	27.0 (4.6)	14.9 (4.7)	18.4 (5.4)	21.2 (4.3)	18.6 (4.1)	20.4 (3.9)	20.5 (3.5)

法による多重比較によれば、S1はS3よりも活動性が低かった。男女とも一人の場面、父親と一緒の場面、母親と一緒の場面の順に活動性が高くなっているが、その違いの度合いが男子の方が大きい。つまり、女子に比べて男子は、他者がいることによって自己の活動性がより高まると感じていた。

社会性では、性別と場面の交互作用が有意傾向($F(2,56)=3.06, p<.10$)であったので、各要因の水準別に単純効果を分析した。その結果、女子における場面の単純効果の有意($F(2,56)=5.50, p<.10$)で、LSD法による多重比較によれば、S1はS2及びS3よりも社会性が低かった。男子は、一人でいようと他者といようと違いは見られないのに比べて、女子は、他者という時には男子と変わらない社会性を見せるが、一人の場面では社会性が低くなると感じていた。言い換えると、男子では社会性が内在化されて直接的な他者からの影響をあまり受けられないけれども、女子は他者の存在の有無によって自己の提示の仕方を変えている様子が窺えた。

以上のように、安定性では、性別に関係なく、他者の存在の有無や存在する対象の違い(父親・母親)によって自己イメージが影響を受けていた。一方で、活動性と社会性には、他者の存在の有無が自己イメージに与える影響に性差が見られた。このように、自己イメージで自分を捉える際には、他者の存在が

自分の印象・感じ方に影響を及ぼしていることが確かめられた。

c. 親との関係と視覚的自己イメージの相関による検討

父親との依存・独立・葛藤尺度と「父親と一緒」の場面の自己イメージ印象性尺度、及びイメージ属性との相関をTable 9とTable 10に示した。自己イメージの安定性、活動性、社会性は、父親への依存欲求と低いあるいは中程度の正の相関があり($r=.59, r=.33, r=.45$)、葛藤と低いあるいは中程度の負の相関があった($r=-.64, r=-.41, r=-.37$)。自己イメージ印象性尺度の各項目は、肯定-

Table 9 父親との依存・独立・葛藤尺度と「父親と一緒」の場面の自己イメージ印象性尺度の相関(n=30)

自己イメージ尺度 依存・独立・葛藤尺度	安定性	活動性	社会性
依存欲求	.59**	.33*	.45**
独立欲求	-.29 ⁺	-.14	.14
葛藤	-.64**	-.41*	-.37*

⁺: $p<.10$, * : $p<.05$, ** : $p<.01$ で有意

Table 10 父親との依存・独立・葛藤尺度と「父親と一緒」の場面のイメージ属性の相関(n=30)

イメージ属性 依存・独立・葛藤尺度	鮮明さ	詳細さ	生命感	自分の姿	リラックス感	自発性	初発時間
依存欲求	.15	-.06	.04	.18	-.01	.17	.04
独立欲求	-.19	-.23	-.04	-.30 ⁺	.08	-.03	.14
葛藤	-.29 ⁺	-.04	-.03	-.19	-.22	-.34*	.12

⁺: $p<.10$, * : $p<.05$ で有意

否定の傾向があらかじめ確かめられており、父親との依存欲求が高いほど自己イメージ全般が肯定的に、葛藤が高いほど否定的に捉えられていることを表している。「親との依存・独立・葛藤尺度」において、父親を対象とした場合、依存欲求と葛藤は比較的負の相関が高く (Table 4: $r = -.68$)、次元の両極に近い関係にある。依存欲求が親への接近や同一化を意味し、葛藤がその逆を意味するならば、父親から求められる自己に理想自己を重ねることで自己肯定的になり、あるいは、それを拒否すると父親の前では肯定的な自分ではいられなくなることを表している。大学生の3・4年生は青年期の後期に属するので、同一化の対象として父親を選択する傾向は減少するはずであるが、この結果からは、受け入れるにしろ拒否するにしろ、父親にその役割を求めている様子が窺われる。また、被験者には女子も含まれているが、大学生という課題解決を求められることの多い環境にいるために、同一化対象として父親を選択することにさほど抵抗がないのであろう。イメージ属性については、葛藤とイメージ想起の自発性に低い負の相関が見られた ($r = -.34$) のみで、親との関係とほとんどの側面で相関が見られなかった。

母親との依存・独立・葛藤尺度と「母親と一緒に」の場面の自己イメージ印象性尺度、及びイメージ属性との相関を Table 11 と Table 12 に示した。自己イメージの安定性は、母親への依存欲求と正の相関 ($r = .50$)、独立欲求や葛藤と負の相関 ($r = -.46$, $r = -.67$) があった。このことから、母親との関係は自己イメージの安定性に多くの部分が反映されることが確かめられた。これは、家庭内における母親の役割が個人の情緒的安定を図ることに重点が置かれていることによるものであろう。イメージ属性については、依存欲求とイメージ想起の自発性に低い正の相関 ($r = .33$)、葛藤と生命感に低い負の相関 ($r = -.35$) が見られ、それ以外には関連のある項目が見られなかった。

以上のように、下位尺度間の相関によって調べら

れる親との関係と自己イメージ印象性の関連は、その対象が父親であるのか、母親であるのかによって異なっていた。父親と母親の家庭内での機能の違いが、自己イメージにこのような形で表れてくると考えられる。また、親との関係とイメージ属性とは、ほとんど明確な関連が見られなかった。これらのイメージ属性は、実際に自己イメージを使って臨床を行う際に、重要な手がかりとされているものも含まれていた (森川ら, 1982) が、親との関係を自己イメージから読みとる際の指標とはなり得ないようである。本研究で取り上げたイメージ属性のほかにも有効な指標となるものがあるのかも知れないが、今後の検討課題とする。

d. 親との依存・独立・葛藤尺度をもとにした類型による検討

依存欲求・独立欲求・葛藤のそれぞれの尺度ごとに、平均より高い得点と低い得点で分けて3尺度で組み合わせると、Fig. 1 のように8つの類型ができる。この類型ごとに自己イメージ印象性尺度の下位尺度の平均とSDを、Table 13 と Table 14 に示した。各類型に当てはまる被験者の人数は1~7人で、統計的処理を行うには少ないため、平均とSDの数値のみから大まかな傾向を探ることとした。

父親との関係と「父親と一緒に」の場面での自己イメージについて、各類型における人数は、II・IV類

Table 11 母親との依存・独立・葛藤尺度と「母親と一緒に」の場面の自己イメージ印象性尺度の相関 ($n=30$)

自己イメージ尺度 依存・独立・葛藤尺度	安定性	活動性	社会性
依存欲求	.50**	.16	-.02
独立欲求	-.46**	-.11	.30 ⁺
葛藤	-.67**	-.21	-.08

+ : $p < .10$, ** : $p < .01$ で有意

Table 12 母親との依存・独立・葛藤尺度と「母親と一緒に」の場面のイメージ属性の相関 ($n=30$)

イメージ属性 依存・独立・葛藤尺度	鮮明さ	詳細さ	生命感	自分の姿	リラックス感	自発性	初発時間
依存欲求	.20	.02	.18	.05	.20	.33	-.16
独立欲求	-.21	.12	.21	.16	-.08	-.15	-.03
葛藤	-.25 ⁺	-.21	-.35*	.07	-.14	-.16	-.09

+ : $p < .10$, * : $p < .05$ で有意

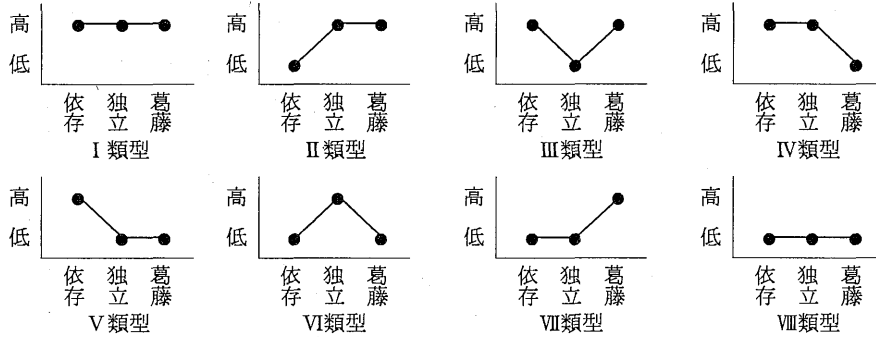


Fig. 1 親との依存・独立・葛藤尺度によって分類された類型

Table 13 親との依存・独立・葛藤尺度(父親を対象)による類型ごとの「父親と一緒に」の場面の自己イメージ印象性尺度の平均(SD)

類型 人数(男, 女)	I 1(0,1)	II 7(3,4)	III 4(2,2)	IV 7(5,2)	V 4(0,4)	VI 4(3,1)	VII 3(2,1)	VIII 0(0,0)
自己イメージ尺度								
安定性	28.0 (1.0)	17.6 (4.5)	26.0 (1.4)	25.4 (5.1)	27.8 (2.6)	27.3 (3.2)	17.0 (7.2)	— (—)
活動性	15.0 (1.0)	15.3 (4.7)	17.0 (0.8)	19.6 (5.4)	22.3 (3.8)	22.8 (8.0)	15.3 (3.8)	— (—)
社会性	21.0 (1.0)	19.9 (2.3)	17.8 (3.9)	23.6 (2.7)	21.3 (3.9)	19.8 (6.6)	17.0 (1.7)	— (—)

Table 14 親との依存・独立・葛藤尺度(母親を対象)による類型ごとの「母親と一緒に」の場面の自己イメージ印象性尺度の平均(SD)

類型 人数(男, 女)	I 2(1,1)	II 4(1,3)	III 3(1,2)	IV 3(1,2)	V 6(2,4)	VI 5(4,1)	VII 2(2,0)	VIII 5(3,2)
自己イメージ尺度								
安定性	22.0 (1.4)	23.0 (8.3)	29.7 (1.5)	28.0 (2.6)	31.0 (2.5)	25.8 (4.0)	24.0 (1.4)	27.8 (1.9)
活動性	22.5 (6.4)	19.8 (2.1)	22.0 (6.1)	17.7 (3.2)	23.0 (5.3)	23.0 (4.3)	22.5 (2.1)	19.2 (3.6)
社会性	27.0 (1.4)	19.5 (3.0)	20.0 (3.6)	20.3 (5.7)	19.2 (2.5)	20.6 (1.5)	20.0 (2.8)	21.0 (4.8)

型で多く、I類型で少なく、VIII類型には全くいなかった。安定性と活動性では、ともに、II・VII類型は得点が低く、それに加えて、V・VI類型は活動性が高かった。社会性については、III・VII類型が低く、IV類型が高かった。

母親との関係と「母親と一緒に」の場面での自己イメージについて、各類型における人数は、ややばらつきはあるものの、父親を対象としたものに比べると偏りが小さかった。安定性については、I・II・VII類型が低く、III・IV・V類型が高かった。これは、

いずれも前者は葛藤が高く、後者は依存欲求が高いという共通性が見られる。活動性については、Ⅳ類型が低く、Ⅴ・Ⅵ類型が高かった。社会性では、Ⅰ類型が高いのみで他には差異は見られなかった。

Ⅰ類型については、対象を父親としても母親としても、この類型に当てはまる被験者は少なく、その結果の考察について、言及を避けることにする。

Ⅱ類型は、親への依存から離れて、独立欲求が強くなったものの、同時に葛藤が生じている状態である。これは、青年期に起きる第二の個体化(Blos, 1967)の過程では、避けられない状態であると考えられる。この状態では、自己イメージの安定性が低下することが特徴的であり、さらに、父親を対象とした場合、活動性も低下する。親との関係では、情緒的な不安定さ、混乱が生じている様子が窺える。

これに比較的似ているのが、Ⅶ類型である。その種類の違いは、独立欲求が低いことにある。自律性を発達させる力が不十分であり、Ⅱ類型は将来的には個体化を達成していくであろうけれど、このⅦ類型はその困難さが予想される。しかし、自己イメージに表れる特徴では、この2つの類型は似通っている。Ⅱ・Ⅶ類型は、いずれも依存欲求が低く葛藤が高い類型で、親からの回避もしくは反発を感じており、それが親との関係での安定性と活動性の低さにつながったと考えられる。

Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ類型は、いずれも依存欲求が高いことに共通点がある。母親を対象とした場合、安定性が高いことで一致している。逆に言えば、母親と一緒にいることで安定性を強く感じている可能性があり、個人としての不安定さを反映しているのかも知れない。一方、社会性について、父親を対象とした場合、Ⅲ類型では低い、Ⅳ類型は高い。いずれも父親に対する依存欲求は高いが、Ⅳ類型では独立欲求が高く葛藤が低いことから、父親に依存しながらも独立した個人としての自律性を発揮していくために、父親に対して肯定的に認められるような自分を表現しているのだろう。

Ⅵ類型は、独立欲求のみが高い。他の類型と比べて、あまり特徴が見られず、強いて挙げれば活動性が比較的高い点であろう。葛藤を感じることなく独立欲求を自覚できるのは、個人として最も安定した状態にあるとも考えられ、それが自己イメージでは活動性の高さになって表れているのだろう。

Ⅷ類型は、母親を対象としてのみ被験者が抽出された。依存欲求・独立欲求・葛藤の3つともが低いというのは、親との関係の希薄さを表しているのか、あるいは、親から心理的にすっかり独立した状態にあるのか、どちらかであろう。いずれにしても、他

の類型と比較すると自己イメージにその特徴は表れていない。

以上のように、8つの類型によって自己イメージの表れ方が様々に異なっていた。また、父親を対象とした場合と母親を対象とした場合では、親との関係の自己イメージへの表れ方に違いが見られた。父親の場合には社会性に、母親の場合には安定性に特徴が表れていた。これは、前述したように、家庭内における両親の機能の違いが反映されたものと考えられる。

本研究では、探索的に検討をするために実験を行ったので、被験者数を多くは取れなかった。そのために、依存・独立・葛藤をもとにした類型による分析では、それぞれの類型での自己イメージの特徴について、統計的な差異を明確にすることができなかった。けれども、大まかな様相について把握することはできた。今後、この結果をもとに、要因を絞ったり被験者の特性を限定したりして実験を行うか、もしくは、方法を工夫してもっと多くの被験者を対象として調査を実施するか、何らかの手だてが必要であろう。臨床への応用を前提に考えるならば、実験的研究の一つの可能性として、今回取り出した8類型と適応の関連を調べ、適応の良否により2、3の類型のみを取り上げて、その類型間で自己イメージの比較を行うことは有効であろう。

要約

本研究では、依存欲求・独立欲求・葛藤を中心とした両親との関係が視覚的自己イメージにどのように表れるのか、特に自己イメージの印象性を指標として探索的に調べることを目的とした。大学生30名を被験者として、「親との依存・独立・葛藤尺度」を実施した後に、個別に実験を行った。「一人」「父親と一緒に」「母親と一緒に」の3つの場面での自己イメージを順次想起させ、「自己イメージ印象性尺度」に評定させた。2つの尺度の下位尺度間の相関を求めたところ、父親を対象とした場合、自己イメージ印象性尺度の各下位尺度と依存欲求が正の相関、葛藤が負の相関を示し、自己イメージに自己肯定感を反映していた。母親を対象とした場合、自己イメージの安定性が依存欲求と正の相関、独立欲求や葛藤と負の相関を示し、自己イメージに安定性を反映していた。また、依存欲求・独立欲求・葛藤によって被験者を8類型に分類し、類型ごとに自己イメージの印象性について分析し、その様相を記述した。最後に、今後の研究の可能性について示唆した。

引用文献

- Bandler, R. & Grinder, J. 1979 Frogs into princes neuro linguistic programing. Real People Press. (坂井一夫(訳) 1987 王子様になったカエルーこころのコントローラー 東京図書)
- Blos, P. 1967 The second individuation process of adolescence. *The Psychoanalytic Study of the child*, **22**, 162-186.
- 井上忠典 1992 視覚的自己イメージと自己概念との比較 日本催眠医学心理学会第38回大会プログラム抄録集, p.11.
- 井上忠典 1995 大学生における親との依存-独立の葛藤と自我同一性の関連について 筑波大学心理学研究, **17**, 163-173.
- Leuner, H. 1977 Guided affective imagery: An account of its development. *Journal of Mental Imagery*, **1**, 73-92.
- Mahler, M.S., Pine, F. & Bergman, A. 1975 The psychological birth of the human infant: Symbiosis and individuation. Hutchinson & Co. (高橋・織田・浜畑(訳) 1981 乳幼児の心理的誕生: 母子共生と個体化 黎明書房)
- 増井武士 1971 自己観察のためのイメージ・ドラマ法 成瀬悟策(編) 催眠シンポジウムⅢ・自己制御・自己治療 誠信書房 156-179.
- 増井武士 1979 ドラマ・イメージ 成瀬悟策(編) 催眠シンポジウムⅨ・心理療法 誠信書房 270-292.
- 森川泰寛・梅田敏文・大山みち子・柴田 出 1982 ATを用いたイメージ療法における自己像の現われ方と変化について 自律訓練研究, **4**, 45-51.
- 大隈靖子 1987 イメージの様式と身体感覚-“している”イメージと“見ている”イメージ-九州大学教育学部紀要, **32**, 153-164.
- Parsons, T. & Bales, R.F. 1956 Family, socialization and interaction process. Free Press. (橋爪ほか(訳) 1970 核家族と子どもの社会化 黎明書房)
- Sears, R.R. 1963 Dependency motivation. In Nebraska symposium on motivation. University of Nebraska Press. 25-64.
- 関知恵子 1982 人格適応面からみた依存性の研究-自己像との関連において- 京都大学教育学部臨床心理事例研究, **9**, 230-249.
- 柴田 出・坂上佑子 1977 ATによるイメージの脱感作療法-その技法と心理力動的な考察- 催眠学研究, **21**, 1-8.
- 柴田 出 1992 精神分析療法 成瀬悟策(編) 催眠療法を考える 誠信書房 20-30.
- 篠竹利和・笠井 仁 1988 治療構造論的観点からみたイメージ分析療法の特徴とその治療上の意義 自律訓練研究, **8**, 38-46.
- 田嶋誠一 1987 壺イメージの経験から 田嶋誠一(編) 壺イメージ療法-その生い立ちと事例研究- 創元社 120-142.
- 高橋恵子 1969 子どもの社会化過程と依存性 岡本夏木ら(編) 児童心理学講座8: 人格の発達 金子書房 90-138.
- 種田真砂雄 1988 認知精神医学序説 金剛出版
- 梅田敏文 1983 イメージ分析療法におけるイメージに伴う問題 催眠学研究, **28**, 25-28.